

農協設立目指し視察

フィリピンの農業従事者

川南
古兵庫
加JA

域事情を背景に発足した経緯や、効率的な農作業に関心を示した。フエンドさんは「日本の農協の仕組みを持ち帰り、フィリピンの農家を自立させたい」と語った。(井上 駿)

貧困に悩む農家が多いフィリピンの島から、農協の設立を目指す視察団が23日までの4日間、加古川市内でJA兵庫南の育苗場や直売所などを見学し、日本の農協の仕組みを学んだ。

今年は国連の国際協同組合年。国際協同組合同盟アジア太平洋地域総会が26～30日、社会運動家が賀川豊彦が日本の生協の礎を築いた神戸で開かれることになった。これに

合わせて、賀川記念館神戸市中央区がフィリピンの視察団を招き、JA兵庫南に受け入れを依頼した。

メンバーは、ミンダナオ島とレイテ島の男女7人。小規模の協同組合に所属し、米や野菜を栽培している。農業支援団体の主宰者でもあるベレン・フエンドさん(56)によると、農業への政府の支援は乏しく、組合など共同組織も貧弱という。「一年中収穫できる作物が同じで、仲買人に買いたたかれる」と話す。

加古川では、農産物の直売所「ふあくみんSH OP」や育苗場を見学。直売の仕組みや、米作りでの生産管理について質問を重ね、共同化による栽培や直売の可能性を探



花の育苗施設を見学するフィリピンからの視察団＝加古川市八幡町船町